

# 音楽教育実践報告誌

第 6 号

2025 年 3 月

静岡音楽教育研究学会



## 目 次

|       |       |   |
|-------|-------|---|
| 【巻頭言】 | 田代 和久 | 2 |
|-------|-------|---|

### 【研究ノート】

|                                                           |       |   |
|-----------------------------------------------------------|-------|---|
| 音楽科における板書を活用した学習指導の考察—3名の教員（小学校，中学校，小中経験）<br>のインタビュー調査から— | 山口 亮介 | 3 |
|-----------------------------------------------------------|-------|---|

### 【実践報告】

|                                                |                  |    |
|------------------------------------------------|------------------|----|
| 『ちいさな秋の音楽会～アニマート’17からの贈り物～』振り返り報告<br>・ ・ ・ ・ ・ | 蒔田 裕香，橋本 朱音，中西 悠 | 22 |
|------------------------------------------------|------------------|----|

### 【書評】

|                                                       |       |    |
|-------------------------------------------------------|-------|----|
| 久保田慶一 著「14歳からの新しい音楽入門—どうして私たちは音楽が必要なのか—」<br>・ ・ ・ ・ ・ | 三沢 大樹 | 29 |
|-------------------------------------------------------|-------|----|

---

### 【事業報告】

|               |           |    |
|---------------|-----------|----|
| 2024年度 事業中間報告 | ・ ・ ・ ・ ・ | 32 |
|---------------|-----------|----|

### 【常葉大学教育学部学校教育課程 音楽専攻生 特別研究(卒業論文)題目】

|            |           |    |
|------------|-----------|----|
| 2024年度 卒業生 | ・ ・ ・ ・ ・ | 33 |
|------------|-----------|----|

|                  |           |    |
|------------------|-----------|----|
| 【音楽教育実践報告誌 投稿規約】 | ・ ・ ・ ・ ・ | 34 |
|------------------|-----------|----|

|        |           |    |
|--------|-----------|----|
| 【編集後記】 | ・ ・ ・ ・ ・ | 37 |
|--------|-----------|----|

## 巻頭言

静岡音楽教育研究学会  
会長 田代 和久

静岡音楽教育研究学会も、おかげさまで発足から 6 年を迎えることができました。これもひとえに、会員の皆さまのご協力の賜物と心より感謝申し上げます。夏の研究会、冬の定例会、そして本音楽教育実践報告誌という三本の柱が、皆さまの支えにより着実に強固なものとなってきたことを、実感しております。

ここで少し、この一年間を振り返ってみたいと思います。夏の研究会では、第一線でご活躍されている音楽教育者による講演が恒例となっています。今回も、音楽教育における ICT 活用の第一人者である小梨貴弘先生をお迎えし、教育現場ですぐに実践可能な、非常に有益な情報を数多くご提供いただきました。

また、今年 2 月の冬の定例会では、令和 4 年度の卒業生であり、現在静岡大学大学院に在籍されている紅林伯彦さんに発表いただき、特別研究へとつながる多くのヒントを得ることができました。昨年 11 月には、令和 2 年度卒業生による演奏会が開催されました。卒業後に同級生が自主的に集まり演奏会を開いたことは、珍しく貴重であり、大変喜ばしい出来事でした。その振り返りの報告もいただいております。音楽というのは、時間をかけて取り組むことで初めて見えてくることが数多くあります。そして、自らが音楽を楽しむ姿勢こそが、音楽教育において非常に重要であると考えています。音楽専攻での学びは、生涯にわたり音楽を愛好するための土台となるものです。さまざまな音楽に触れ、知識を深め、自ら歌いたい・演奏したい曲を探すといった能動的な姿勢が、近年やや希薄になってきているようにも感じます。学生会員の皆さんにとっては、音楽を愛好する素養を身につけることの必要性、卒業後もそれを継続することの価値を実感するよい機会となったのではないのでしょうか。

最後になりましたが、刊行にあたりご多忙の中、編集作業にご尽力いただきました役員の皆さまに、心より感謝を申し上げます。音楽や音楽教育への関心をもち、研究会、定例会へ積極的に参加する学生会員も増えてきております。今後は卒業生を中心とした本会員の皆さまのより一層のご参加、そして会員同士の交流がさらに深まることを期待しております。

## 《研究ノート》

### 音楽科における板書を活用した学習指導の考察 —3名の教員（小学校，中学校，小中経験）のインタビュー調査から—

山口 亮介\*      力田 和歌子†

#### 抄 録

本研究は、小学校や中学校の音楽科における板書を活用した学習指導に焦点を当て「1. 板書を活用する指導技能を教師はどのように習得するのか」「2. 板書の構成要素は何か・領域や分野，教科間，校種間の共通点や相違点はあるのか」「3. 掲示物や ICT 活用との連携はあるのか」について，3名の教員（小学校教員，中学校教員，小学校を経験した中学校教員）へのライフヒストリーを含めたインタビュー調査及び書籍や音楽教育雑誌の調査を行った。その結果，3名は大学や教育実習時には板書についての指導がなかったこと，中堅者前期（教員4年目）以降の，研究授業の実施や指導助言（研修），音楽科や他教科の授業参観（校内研修），音楽を形づくっている要素の意識化（学習指導要領の改訂），一人一台端末の導入（GIGA スクール構想），音楽専科の経験（学級担任から音楽専科へ），教育実習生への指導（教員としての立場の変化）などが端緒となったことが明らかになった。

キーワード：板書，ライフヒストリー，構成要素，ICT 活用，掲示物

#### 1 研究の背景と目的

音楽科学習の板書について，文部科学省（2018a）（2018b）による『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』の記載は確認できない。一方，文部科学省（2018c）（2018d）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』では，道徳科に生かす指導方法の工夫として「板書を生かす工夫」の具体的な記載が確認できる。しかし，多くの教科等では板書についての記載がされていないか，留意点が記載されているのみで，具体的な1時間の授業の板書を活用した学習指導について，どのように行うか分かる記載はない。

しかし，小学校の国語科や算数科などの教科用図書の教師用指導書などでは，1時間の授業の板書例が記載されているものもあり，その構成要素を含め黒板に何をどのように記載するかは，教員の中である程度の共通した認識があることに対し，音楽科の学習指導においては教師用指導書に板書例が記載されていないため，黒板に何を書くか，板書を活用した学習指導をどのように行うかは，個々の教員によるところが大きい。

国立情報学研究所の学術情報ナビゲータ CiNii において，「(各教科等)」 「板書」 で検索し，表示された関連する論文などの数は，表1に表す結果であった。

---

\* 常葉大学教育学部

† 長崎大学教育学部附属中学校

表 1 各教科等の板書に関わる論文などの数（2024/9/22 現在）

| 国語  | 算数  | 理科  | 社会  | 音楽 | 図工<br>美術 | 体育 | 家庭 | 生活 | 総合  | 外国語 | 道徳  | 特別<br>活動 |
|-----|-----|-----|-----|----|----------|----|----|----|-----|-----|-----|----------|
| 253 | 161 | 130 | 427 | 4  | 9(4)     | 6  | 25 | 33 | 140 | 37  | 108 | 42       |

このことから、国語科、算数科、理科、社会科、総合的な学習の時間、特別の教科 道徳において、板書についての研究が多く行われていることに対し、音楽科は全教科等の中で最も少なく4件であるなど、他教科等に比べ音楽科の学習指導について板書を活用した学習指導があまり注視されていない実態があることが伺える。

本研究を行うにあたり、音楽科の学習指導において、日頃から板書を活用している教師は、その板書を活用した学習指導の技能をどのように身に付けてきたのか、また、音楽科学習においてどのような板書（構成要素、共通点や相違点、掲示物や ICT との連携など）を活用した学習指導を行うことが良いのかという問いをもった。そこで、本研究では、小学校や中学校での音楽科の授業において「1. 板書を活用する指導技能を教師はどのように習得しているのか」「2. 板書の構成要素は何か・領域や分野、教科間、校種間の共通点や相違点はあるか」「3. 掲示物や ICT 活用との連携をどのように行っているのか」の3つの視点について、教員へのライフヒストリーを含むインタビュー調査、及び音楽教育に関わる書籍や雑誌の記載内容の調査から明らかにすることとした。

## 2 先行研究

中学校・高等学校の国語科教師であった大西（1987）は、他者の授業参観や自身の授業の経験から、板書を「表現的板書（生徒が反応したり答えたり意見を述べたりしたことを板書する）」「構成的板書（黒板全体を一つの構成された図として使う）」「体系的板書（学習内容を体系的・系統的に書く）」の三種類にまとめ、「体系的板書を基本にして、教材・授業のねらい・子どもの状況に応じて、他の表現的板書・構成的板書をくみこむことができるのが、プロとしての教師の力量」（pp.129-130）と述べている。佐藤（2017）は大西が述べる三つの板書のスタイルを科目や学習目標を踏まえて選択することを推奨している。

大坪ら（2022）は、教師自身の板書計画とノート指導に関するイメージについてグラウンデッド・セオリー法を用いて分析し、板書計画とノート指導の目的の中心にある教師の意図や意識、その方略を明らかにしている。調査により教師による板書計画の概念について、《思考の補助》《思考の整理》《精選》《オリジナルのノート》《見やすさ》《要求》の六つのカテゴリーに整理している。さらに教職経験年数からの比較分析の結果からは、「経験年数10年未満・以上の両者と中学校の教師は、「板書計画」を《思考の補助》《思考の整理》と捉えている割合が高い」「経験年数10年以上の教師は下学年・上学年のどちらにおいても《見やすさ》を重視する割合が高いのに対して、10年未満の下学年担当者の割合が低い」（p.112）と述べるなど、教員の教職経験年数による違いを指摘している。

音楽科学習の板書に焦点を当てた研究自体は少なく、本研究との関わりがあるものとしては、長島（2009）、熊倉（2024）、平野（2023a）が挙げられる。

長島は、音楽科授業実践力スタンダードを開発し、音楽教師に期待される資質・能力を授

業構想力、授業展開力、授業評価力の三つの能力群に区分し、授業展開力の下位能力としての教具の活用において、板書（内容・方法）を示している。鳴門教育大学では教育実習の前後と卒業後の3つの時期に期待される達成状況について記載されている「授業構想力評価スタンダード 音楽科【詳細バージョン】」の活用を試みており、教育実習前の学生の自己評価から板書の方法について大学の授業の工夫の必要性について指摘しているが、音楽科における板書の構成要素などの具体的な記載は示されていない。

熊倉は、小学校第4学年の鑑賞領域の学習場面における、板書を活用した交流場面の考察を行っている。研究協力者と板書を作成し振り返ることで、「子どもが音楽について考えるために必要な言葉を獲得し知識を身に付けるために役立つ可能性がある」「教師が板書にどのように何を書き表すのかを事前に予想しておくことは、教師の手だての改善につながり、子どもが音楽について考える環境を生み出した」（p.70）と述べ、板書を活用した学習指導の効果について明らかにしている。

平野は、小学校音楽科での板書について、その意図を「①見えにくい音や音楽を捉えることができる【視覚化】」「②イメージや要素などを構造的に示すことで、音楽の全体を捉えることができる【構造化】」「③一人一人の気づきや自分なりの考えを共有したり、共感したりすることができる【共有化】」（p.21）と述べ、実践の具体について写真を用いながら解説している。

その他、「2. 板書の構成要素・共通点や相違点」「3. 掲示物や ICT 活用の連携」について、音楽教育書籍や音楽教育雑誌などで確認できるものもあり、小学校の板書を活用した学習指導については音楽之友社(2023)『教育音楽小学版 11月号』の特集「今こそ求められる教師の板書術&掲示物」より平野、米山、佐藤、水門、堀川、石上、齊藤、根本などの記載が挙げられる。中学校の板書を活用した学習指導については、清水（2022）の具体的な板書の写真や構成などの記載が確認できる。しかし、「1. 板書を活用する指導技能の習得」の視点での記載は確認できなかった。

### 3 研究の方法

#### 3.1 調査の方法

まず、「1. 板書を活用する指導技能の習得」について、高見（2011）による小学校音楽教員へのライフヒストリー研究を参考に調査を行う。まず、教職経験の概要について、各教員（小学校教員1名、中学校教員1名、小学校及び中学校両校種での勤務経験がある教員1名）のライフステージを可視化できる略歴表（縦軸に〈教職歴（年数）〉、横軸に〈勤務先〉、〈担当〉、〈指導学年〉、〈音楽教員としての転機及び特記事項〉、〈板書を活用した指導〉から構成）を、研究協力者自身が記載する（30分）。その後、研究協力者に対しインタビューガイド1（表2）を基に、対面（研究協力者の勤務先、又は公共施設の会議室）で第1回目の半構造化面接（30分）を行う。録音許可を得られた場合には対話の内容をICレコーダーで録音し、その後文字起こしして研究協力者に内容の確認を取る。また、録音許可を得られなかった場合には、その場で筆者が発話内容を文字起こし、その後、協力者に内容の確認を取る。

「2. 板書の構成要素・共通点や相違点」は、書籍、雑誌等の記載内容を調査し、整理する。また、本研究への協力者へのインタビューガイド2（表3）を基に研究協力者への第2回目の半構造化面接を行い（30分）、板書の構成要素や、共通点や相違点についての調査を

行う。

「3. 掲示物やICT活用との連携」も同様に、書籍、雑誌等の記載内容を調査し、整理する。インタビューガイド3（表4）を基に研究協力者へ第2回目の半構造化面接時に実施（15分）し、それぞれの有効事例や課題について調査を行う。

なお、本研究は常葉大学倫理審査委員会の承認を得ており（承認番号：研草24-2）、事前に研究協力者への研究趣旨や目的、内容の説明を行い、学校名や個人が特定できないようにすること、研究外での使用をしないことなどの同意を得た上で実施した。

表2 インタビューガイド1（板書を活用した指導技能の習得について）

- 大学や教育実習時の板書についての考えを教えてください。
- 初心者前期（1年目）～初心者後期（2・3年目）の板書についての考えを教えてください。
- 中堅者前期以降（4年目）以降の板書についての考えの変容があれば、ライフヒストリー表の時系列に沿って教えてください。
- 現在、板書を行う際に留意していることがあれば教えてください。

表3 インタビューガイド2（音楽科学習の板書の構成要素・共通点や相違点について）

- 先生が考える音楽科学習での板書の構成要素は何ですか。
- 領域や分野による板書の共通点や相違点はありますか。
- 他教科と音楽科の板書の共通点や相違点はありますか。
- 黒板への掲示物や楽譜の提示をどのように行っていますか。
- 音楽を形づくっている要素や用語や記号をどのように板書に活用していますか。
- 板書に思考ツールを用いることはありますか。
- 小学校で重視されている「1時間の学びの足跡」についての考えを教えてください。
- 小学校と中学校の板書の共通点や相違点はありますか。

表4 インタビューガイド3（掲示物やICT活用との連携について）

- 電子黒板やデジタル教科書などと板書の関連についての実践や先生の考えを教えてください。
- 音楽室の掲示資料や板書の関連についての考えを教えてください。

### 3.2 研究協力者について

本研究の調査にあたり、インタビューを行う研究協力者の条件を以下のように設定した。

- (1) 音楽科学習において板書を活用した授業を実践している教員
- (2) 現在音楽の授業を行い、教職経験15年以上、教育実習指導や教員に向けての講演など音楽教育に指導的な立場を経験した教員（小学校教員1名、中学校教員1名）
- (3) 現在音楽の授業を行い、小学校及び中学校の両校種の音楽指導の勤務経験がある中堅以上の教員（1名）
- (4) 調査にあたってプライベートな内容にも触れる可能性があるため、調査以前から研究者とある程度のラポールが成立している教員

なお、本研究の協力について同意を得られた3名の教員の略歴は以下の通りである（勤務校は、1校目よりアルファベット順に記載）。

教員α：小学校教員（教職19年目）、X県勤務、女性、小学校を5校勤務（A小学校4年、B小学校3年、C小学校6年、D小学校4年、E小学校1年）、3校目のC小学校で部活動での合唱指導を開始、音楽専科を初めて経験し、以降、音楽教育研究や授業公開、教育実習指導、研究紀要や音楽教育雑誌の執筆などを行う。

教員β：中学校教員（教職21年目）、X県勤務、女性、中学校を5校勤務（A中学校3年、B中学校3年、C中学校7年、A中学校7年、D中学校1年）、1年目より部活動での合唱指導を開始し、2年目、4年目、6年目で研究授業の公開を経て、3校目のC中学校以降、音楽教育研究や授業公開、教育実習指導、研究紀要や音楽教育雑誌の執筆、自治体の教科用図書調査員などを行う。

教員γ：中学校教員（教職9年目）、X県勤務、女性、小学校1校（A小学校5年、音楽専科、非常勤講師）、中学校（B中学校3年、C中学校1年）、教職1年目より電子黒板などICTを活用した授業実践を行う。

## 4 調査結果

本章では、4.1で板書を活用する指導技能の習得、4.2で板書の構成要素・領域や分野、教科間、校種間の共通点や相違点、4.3でICTと掲示物との連携の調査結果について述べる。

### 4.1 板書を活用する指導技能の習得について

#### 4.1.1 大学や教育実習時

小学校教員αは「音楽科において特別な板書の指導を受けた記憶はありません。国語や算数については、めあてやまとめ、学習活動に関わる言葉、子供達の考えを黒板に残すよう指導があったように思います。」と述べ、他教科での指導を受けた経験について指摘している。

中学校教員βは「板書については、特に触れられませんでしたし、指導も特に受けることもなかったです。」「大学での模擬授業において、友達が鑑賞の授業を行う際に、字を綺麗に書きなさいと言われたことを覚えています。」と述べる。

小学校教員を経験した中学校教員γは、「教育実習の時、板書についての指導はなかったです。楽譜を担当の先生が用意されていたので、同じように楽譜を用意して、そこに書き込んでいくということを中心に行っていました。めあては毎時間立てていたのですが、特にまとめなどを書くことの指導は受けていないです。」「大学の授業でも、板書について特に指導を受けていないです。」と述べる。

調査の結果から、3名の教員とも、大学の授業や教育実習時に、板書を活用した音楽科の学習指導について、具体的な指導を受けた経験は確認できなかった。

#### 4.1.2 初心者期（1年目～3年目）

教員αは、「音楽科において板書が必要だという考えをもっていませんでした。初任者研修等で、見やすい板書、子供たちに分かりやすい板書、構造的な板書が必要であるという指導はありましたが、国語科や算数科での話だと捉えていました。」「結局は羅列的にしか（書くことが）できず難しかったです。音楽科の師範授業で黒板に貼った拡大楽譜への書き込みを見て、取り入れることもありましたが、正直なところ音楽科の板書まで考える余裕は無い日々でした。」と述べる。

教員βは、「初任者研修の時に板書についての指導を受けたことはあまり記憶していません

ん。」「3年次の研修において《魔王》の鑑賞の授業を行いました。プリント（ワークシート）を拡大し模造紙大にして書き込むような授業を行いました。（中略）参観された指導主事の先生から、黒板の板書についてのフリップボードを提示されて、文字の太さや大きさが大切であるとの指導を受けました。」と述べる。

教員γは、「小学校に勤める前に一回授業を見る機会があつて、その時に〈ああ、板書ってこんな風にするんだ〉と感じ、手本になるものがあつたので、一気にこういうふうにしていくんだという目標ができました。」と述べる。教員γは、1校目は非常勤講師としての小学校音楽専科での勤務であつたが、働き始める前の授業参観の経験が、その後の板書を活用した授業の実践につながっており、「音楽を形づくっている要素のカードを事前に準備しておいたりとか、子供の考えを黒板に残していったりすることはきちんとやろうという意識はあつて、めあてもまとめもその時は書いていました。」「1年目は高学年の音楽専科として音楽室を使わせてもらっていたので、電子黒板に楽譜を出しながらそこに書き込んだりしていました。2年目から低学年の音楽専科において、集会室で授業をやっていたので電子黒板がなく、そこからは代わりに拡大した紙を使うようになりました。」と述べ、ある程度の板書計画の準備や、黒板と電子黒板を併用した授業の実践について、教員1年目から取り組んでいたことについての回答が得られた。

調査の結果から、初心者前期（1年目）～初心者後期（2・3年目）について、「音楽科において板書が必要だという考えを持っていませんでした（教員α）」「プリントを拡大し、模造紙大に印刷して書き込むような授業（教員β）」という回答からも、2名の教員はこの時点では板書を活用した学習指導について重要性を感じていないことが伺える。一方、教員γは、授業参観の機会を端緒として、ある程度の板書の構成要素について把握し、その後の板書を生かした学習指導を行うことができていることが特徴として挙げられる。

#### 4.1.3 中堅者期（4年目以降）

教員αは、「音楽科指導についての勉強をすることもないまま2校目、7年目までを過ごしました。」「8年目で3校目の学校に転勤し、音楽専科となつてから、授業を観たり指導を受けたりして音楽科指導について学ぶ機会が増え、授業のあり方について考え方が変わりました。（中略）板書計画を行うようになり、板書をするようになりました。音楽科にもめあてが必要で、まとめは書かないにしても、この授業で何を学んだのかというポイントとなる言葉を必ず板書の中に残すようにしました。それは子供達が学習を振り返るときに、45分間板書が何もない状態では、学習を振り返りづらいことを知ったからです。話し言葉だけで振り返るよりも、黒板に貼ったものや書いたものを指し示すことで、〈ああ、そうだった。〉と子供達が学びの足跡に納得し、学習したことを板書の力でより意識化できることが分かりました。子供達自身の音楽的な言葉や用語を使う力の高まりも感じました。」と述べ、板書を活用した学習指導の効果について実感を得ており、大西が述べる体系的な板書を基本として表現的板書・構成的板書が組み込まれている学習指導が意識されている。また、「教育実習生への指導の際にも、音楽科における板書の大切さを伝え、実習生が授業を通してそのことに納得したり、子供達への効果的な指導になる様子を見たりして、板書の効果を実感します。」と述べ、自身の板書を活用した授業の実践について教育実習生へ指導を行い、実習生が行った授業での児童の様子からもその効果についても実感する経験を重ねていることが特徴として挙げられる。

教員βは、「板書を意識したのは3校目、教員7年目でした。（中略）国語科の先生方が板書に力を入れており、1時間の授業の流れを板書に生かすことを意識されていました。（中略）実際に、授業を見に行き、その後自身の授業にも取り入れようとするようになりました。」

「3校目である程度自身の板書の形が定まったと思います。社会科の先生方が板書を図として書き出すことも参考になりました。矢印の太さや色にこだわって作成したり、図として表したりすることは、自身の板書にも取り入れるようになりました。」と述べ、他教科の授業参観から学んだことを自身の授業に生かすという経験をしている。また、この時期に「音楽を形づくっている要素が学習指導要領に出てきた際に、要素をカードにして黒板に貼るようになりました。」と述べ、2008年の学習指導要領改訂により、共通事項に音楽を形づくっている要素が示されたことが端緒となったことについて述べている。さらに、「10年目に《越天楽》の授業を行った際には、生徒の感じ方の変容について、最初はAのように思っていたけれど、A'やBだったと変容が可視化できるようにと指導助言を受けました。」と述べるように指導助言から、その後、自身の板書が生徒の思考の変容を可視化できるようになったことについて述べるなど、大西が述べる表現的板書について根拠を明確にして可視化し、学習指導に生かしていることが意識されている。中堅者期以降を振り返って「自身の板書が変わるきっかけは、研究授業での指導助言が多かったです。自身の授業を見てもらい、しかし自身でも考えており、その両方が大切だと考えています。」と述べている。

教員γは、「六年目に中学校の教員になりました。その年に一人一台端末でクロームブックが配布されました。（中略）生徒が一回一回ワークシートを提出しなくても、こちらで途中経過を見ることができるようになりました。」「自分のiPadを黒板に映して〈こういう考えがあったよ〉と紹介したりできた。」「板書の仕方はICTが入ったのが大きいのですが、板書の構成要素的には、あまり小学校とは変えていないです。」と述べ、従来のように板書を活用した学習指導を行いながらも、端末を活用することが教師の手立てとして加わったことが特徴として挙げられる。さらに「三校目（教員9年目）の学校ではロイロノートになったので、題材のまとまりがわかりやすくなりました。」と述べ、授業の板書と合わせて、題材の学習をどのように蓄積するかということの意識の変容について述べている。

このことから、中堅者期以降の板書を活用した授業においては、各教員にとっての端緒は様々であるが、板書を活用した授業の指導技能の習得についての転機が訪れていることが特徴として挙げられる。

## 4.2 板書の構成要素・領域や分野、教科間、校種間の共通点や相違点

本節では、4.2.1で書籍や音楽教育雑誌などから得られた板書の構成要素について、4.2.2では3名の教員から得られた板書の構成要素について、4.3.3では領域や分野、教科間、校種間の共通点や相違点について述べる。

### 4.2.1 書籍や音楽教育雑誌の記載による板書の構成要素

大学の教職課程で使用されている書籍で、小学校の板書を活用した学習指導に記載が確認できるものとして、初等科音楽教育研究会（2020）は、学習指導案作成の実際として、「板書計画や発問計画、子供の状況や支援計画を添付することもある」（p.35）と述べ、教育実習や研究授業での学習指導案の作成について、場合によっては板書計画の提出が求められる可能性について指摘している。小島（2018）は、小学校3年生のリコーダー（器楽）《たこたこあがれ》（p.85）、鑑賞《動物の謝肉祭より》より〈象〉（p.93）、5年生の鑑賞《組

曲《くるみ割り人形》より《行進曲》（p.113）で、展開の中に一部板書の記載を提示している。有本ら（2021）、高見（2018）による書籍については、学習指導案の記載は確認できるものの、1時間でどのような板書を行うのかについての全体構成が分かる記載や板書を活用した具体的な指導は確認できなかった。

中学校の板書を活用した学習指導の記載について、1時間の授業全体の板書の構成が分かるものとして、齊藤ら（2019）は鑑賞《トッカータとフーガ ニ短調》において、1時間全体の板書計画（例）を学習指導案に記載（p.73 牛越による記載）し、〈本時の学習目標〉〈教材曲名〉〈作曲者名〉〈聴き取ったことをまとめる表（縦軸：フーガ、曲全体の仕組み 横軸：聴き取ったこと、感じ取ったこと）〉〈拡大楽譜〉〈要素などのカード（旋律、フーガ、音色、テクスチュア）〉〈曲の背景としての情報（パイプオルガンと教会音楽、バッハの音楽）〉などが確認できる。

文部科学省（2018a）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』、文部科学省（2018b）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』において、板書を活用した学習指導の具体的な記載は確認できない。しかし、国立教育政策研究所教育課程研究センター（2021）では、小学校3年生の鑑賞「地域の祭囃子に親しもう」の学習で、板書の写真が提示（p.82）されており、〈めあて〉〈前時の内容〉〈聴く時のポイント〉〈要素（はやす、楽器の音色、リズム）〉〈打ち込み（はじめ）〉〈はやし（なか）〉〈あげ（おわり）〉、〈口唱歌のカード〉があり、教員が1時間の授業でどのような板書を行ったかが確認できる。

音楽教育雑誌では、小学校の音楽科学習での板書の具体について、音楽之友社（2023）『教育音楽小学版11月号』の特集記事から、多くの教員からの指摘が確認できる。佐藤（2023）は、「板書は、①消えてなくなってしまう音や音楽に見える化し、②思考の流れを可視化して、③本時1時間の学習が見えるようにし、授業がお終わった後、児童が授業の内容を振り返ることができるものになるよう心掛けています。（中略）特に音楽科の授業では、消えてなくなってしまう音や音楽を用いて授業を進めていくため、他教科と比べて、より板書に残していく必要があると考えています。」（p.28）と述べる。

水門（2023）も同様に「他の教科以上に「可視化」することが大切だと思っています。」（p.30）と指摘し、「一時間の授業の流れが一目で分かるように」とよく言われますが、私は「授業の流れ」というよりは「楽曲」が一目で分かるような板書をすることが多いです。」（p.30）と述べ、図を用いて板書することや、板書はあくまで指導のツールであるとしている。米山（2023）は、「教師と子どもでつくる「1時間の学びの足跡」です」と述べ、鑑賞授業の板書設計例として、「①教材名を書く」「②導入で本次に関わる常時活動や資料の提示を行い、「学習課題」を書く」「③中央に「聴き取ったこと」「感じ取ったこと」を書く」「④黒板の右側には、学習課題に対応した「まとめ」を記載するスペースを設ける」（p.26）のように、1時間の学習内容をどのように板書として残すかについての具体例が示されている。

堀川（2023）は、黒板を3分割し「右側部分は、1時間の授業の流れを示すために使用」「左側部分は、五線を引いて、五線黒板として使用」「中央部分は、演奏の仕方や歌い方について説明」（p.32）と述べる。

中学校の音楽科学習での板書について、清水（2022）は、板書の配置として、教室中央に黒板（固定の板書）、教室左側にホワイトボード（生徒と作り上げる板書）、教室右側にスクリーン（ICTを活用する板書）を示している。固定の黒板の板書については、「①まずは、

黒板の1番上には、「題材の目標」や「本時のねらい」を板書、「②黒板の左側は、「授業の流れを板書」（導入、今日のメイン、まとめ（振り返り）」、「③黒板の中央は「授業のポイント」を板書」（発問カード、キーワードカード）、「④黒板の右側は、あなたの心を動かす「音楽の中味」を板書」（要素カード、用語や記号のカード）と図（p.21）で示している。ホワイトボードには、「ワークシートを拡大した「拡大掲示物」を貼ったり、表を大きく書いてその中に記入」、「楽譜を拡大し、そこに生徒個人の意見を書き込んだり、付箋を貼ったりして「生徒の考え」を共有することに生かします」「グループで話し合い、「思いや意図」を記入した「協働ワークボード」を提示して、「学びの内容」を深めることに生かします」（p.21）と述べる。また、「スクリーンやテレビ、電子黒板などを利用して、写真、動画、音源入りのPowerPointを活用します」「生徒のワークシートの記述やつくった作品、演奏した動画などをリアルタイムでスクリーンに映して共有します」（p.21）など、ICTとの連携の具体例についての記載が確認できる。

#### 4.2.2 3名の音楽教員へのインタビューから得られた板書の構成要素

次に、板書の構成要素について3名の教員のインタビューの内容について述べる。

小学校教員αは、「めあてと曲のイメージ、楽譜、リズムの図、旋律図、曲にかかわる写真など音や音楽を可視化するもの、子どもの意見や考え、学習内容のポイントです。音楽を形づくっている要素などの音楽の言葉も大切です。」「作詞者や作曲者なども中・高学年では曲によって写真等と合わせて紹介します。」と述べる。

中学校教員βは、「曲名や作曲者名は書きます。但し、最初は曲名を伏せることが多いです。」「授業内で出てきた生徒の発言や意見、考えは板書します。」「要素のカードは貼ります。」「めあては書いています。まとめは、教材曲や学習内容によってあるときとない時があります。」「楽譜の提示は、電子黒板がないのでテレビに映して行っています。iPadから繋いで画像として提示しています。」と述べる。

小学校教員を経験した中学校教員γは図1を提示し、「黒板が四面あって、要素（図2）、前時までの資料、本時の活動、題材のめあて、本時のめあて、要素、本時の軸となる資料、導入で使った物、生徒の考えと電子黒板に生徒の考えたワークシートを映したり楽譜も出したりします。」と述べる。

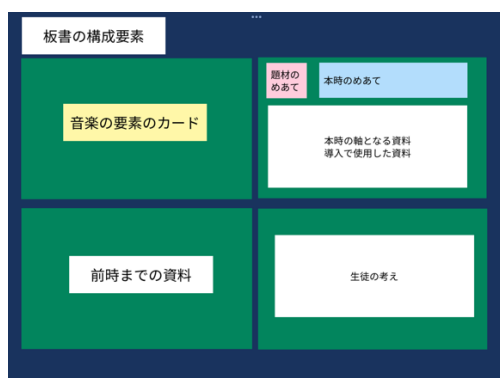


図1 黒板の活用の全体像

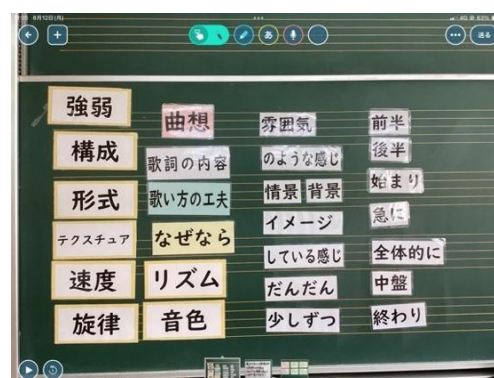


図2 音楽を形づくっている要素のカード

板書する際の留意点については、3名の教員から表現的板書を中心とした工夫が挙げら

れた。

教員αは、「どの教科においてもですが、音楽科でも子供たちと本時の課題を明確に共有するため、めあてを必ず書きます。また、学習の見通しや音楽から感じたこと、分かったこと、ポイントも子供の言葉をもとにしながら書きます。」「楽譜を提示します。大切な思考の根拠になるからです。また、音楽は目に見えないので、想像を膨らませられるようなイラストやイメージの写真も用います。子供達の発言をもとにしながら、音の図や音やイメージを言語化したもの、習得して欲しい音楽の言葉もねらいに応じて書きます。」と述べる。

教員βは、「板書をそのまま生徒が書き写すことがあるので、生徒が書いて欲しい内容を精選して板書しています。」「書く言葉は吟味しており、例えば生徒が発言したことも、〈つまり〇〇のことだよ〉と場合によっては言い換えて板書しています。」「授業によっては、まとめの言葉を書く時があるのですが、「てにをは」によって内容が変わることがあるので、端的に書くように心がけています。」「視覚的にも色や枠を付けています。」と述べる。

教員γは、「生徒の考えはきちんと黒板に残しておきたい。」「全体で共有するときは、できるだけ黒板の方がわかりやすいのかなと思います。」「小学校よりも中学校の方が黒板に掲示する資料の多さは増えました。」と述べる。

黒板への掲示物（教材）や楽譜の提示について、板書と関連させた指導について以下のように述べる。

教員αは、「常時、要素やイメージに関わる言葉は別の黒板に貼っていて、常に意識できるようにしています。姿勢など常に意識させたいものは周りに掲示しますが、その時間に必要なものは黒板に貼ります。」「楽譜は模造紙に拡大したり、電子黒板に楽譜、映像資料、デジタル教科書、写真を映したりします。」と述べる。

教員βは、「楽譜の提示はテレビで行っています。」「要素のカードは黒板の左横に貼っていて、必要に応じて活用することが多いです。」「教室の後ろに「（曲想の）感受に関わる言葉」「知覚に関わる言葉」の具体例を掲示し、活用できるようにしています。」と述べる。

教員γは、「カードを用意したり、紹介コーナーを作ったり、学年間や学校全体で共有できるように学習の成果を掲示しています。」「教室の周りに音楽を形づくっている要素についての掲示を行っています。例えば、強弱とかだったら〈だんだん強く〉〈急に強く〉とか。生徒たちは、なかなか言葉が出てこなくて。音色に関しては楽器の写真を貼っています。」と述べる。

音楽を形づくっている要素や、用語、記号の板書への活用についても以下のように3名の教員の板書を活用した指導が確認できる。

教員αは、「カードにして板書したり、実際に書いたりしています。前の学校では音楽室内に掲示していました。」と述べる。

教員βは、「用語や記号は出てきた時に取り扱っています。」と述べる。

教員γは、「カードを基本的には使っています。新しく記号とか用語が出てきたときは、常に掲示しているわけではなく、その時にカードを作って提示しています。」と述べる。

板書に思考ツールを活用することについて、以下に述べるように3名の教員は各々の考えや授業の目的に沿ったものを選択して実施している。

教員αは、「イメージマップは題名からや曲名から書きます。歌唱、器楽、鑑賞で使用しています。表は、鑑賞で使用しています。曲のイメージを掴むときには、ワークシートに書

いたりします。」と述べる。

教員βは、「鑑賞の授業の際に、表（表5）を用いています。表現の授業においても比較聴取するときにこのような表を使っています。」と述べる。

表5 教師βが用いる思考ツール

| A | 要素 | B |
|---|----|---|
|   |    |   |

教員γは、「根拠を述べられるようにしようという指導を受けています。（中略）前の学校でも今の学校でもよく話に上がります。（中略），こんなふうに、なぜならっていうのを入れるようにして（表6を示しながら）。」と述べる。

表6 教師γが用いる思考ツール

|       |      |           |
|-------|------|-----------|
| 感じたこと | なぜなら | 要素で気づいたこと |
| 感じたこと | なぜなら | 要素で気づいたこと |

1時間の学びの足跡が残る板書について、3名とも以下のように意識して取り組んでいることについての回答が得られた。

教員αは、「（板書を見て）必ず振り返りを書かせるということはしていました。何を学んだのか、思いや意図を持つことであれば、どういう思いを持って演奏したのかということが分かるように振り返りを書かせていましたし、歌えるようになる、吹けるようになるということであれば、その授業に沿った振り返りはしていたことと、イメージマップに蓄積する、教科書に記載することを意識していました。」と述べる。

教員βは、「今後も1時間の流れが分かる板書は継続して行っていきたいです。ただ、これを行うためには、あらかじめ板書を整理する必要があります。板書を考えることはとても有意義で、自分の授業を考える上で必要だと考えます。また、書く内容についても吟味しますので、結果として授業を整理することにつながっています。」と述べる。

教員γは、「一時間一時間の振り返りも書かせますし、一時間の学びの足跡が分かるように板書も意識しているのですが、ロイロノートになってから、より題材、一時間一時間よりももっと大きく題材で何を学んだかが分かるようにというふうに、意識して授業できるよ

うになったと思っています。さすがに黒板はこれだけしかないから全部は掲示することができないのですが、生徒たちの iPad の中に題材の学びはどんどん蓄積されていくという感じになっています。」と述べる。

#### 4.2.3 領域や分野，教科間，校種間の共通点や相違点について

まず，領域や分野による板書の共通点や相違点について3名の教員のインタビューの内容について述べる。

小学校教員αは、「どの領域でも，めあて，音楽を形づくっている要素，感受したことや表現に関する子供の考え，学習のポイントは書きます。歌唱や器楽では，楽譜から読み取れることや子供達の表現への思いや実現する方法を書きます。」「音楽づくりでは，音やリズムの書き表し方，条件や活動の仕方についての約束事を書きます。」「鑑賞では，作曲者にかかわる情報や写真，用いられる楽器の写真や名前，旋律図を板書に残します。音楽の構成を図に表すこともあります。」と述べる。

中学校教員βは、「歌唱の授業ではあまり板書を行いません。」「器楽の授業は，リコーダーの運指表は常に掲示しています。リコーダーの運指表も，リコーダーの吹き口が下になっている図を活用しています。」「鑑賞の授業では，めあてやまとめについて記載しています。」「領域や分野による共通点は，曲名や作曲者，めあてなどは常に記載している。」と述べる。

小学校教員を経験した中学校教員γは，「共通する部分としては，曲想と音楽の要素のつながりに関しては，どの領域や分野でも結構板書を取っているかなと。創作でも導入の時点で何か必ず鑑賞は入れているので，その時には曲想と音楽の要素に繋がるような板書をしています。」「領域や分野による違いは，創作に関しては結構資料が多い。課題や条件，リズムカード，常時，リズムリレーなどしているので，その時に使ったカードを常に貼っておき，自分が作った作品，お手本の作品とかも常に貼っているので，結構多くなることが多いです。鑑賞に関しては，作詞者，作曲者についての資料も貼っていて，中学校になると2，3年生は歴史的背景，その曲の背景についても触れるので，歌唱や鑑賞に関してはそういう資料が入ってきます。器楽とか歌唱については，技能的なこと，身体の使いかたとか，楽器を演奏する時のポイントを掲示しています。」と述べる。

次に，他教科の板書との共通点や相違点について3名の教員のインタビューについて述べる。

教員αは，「他教科との共通点は1時間の流れを書くことです。めあてを立て，見通しを持ち，子供の自力解決に必要なヒントが板書にあって，自力解決した後の子供達の考えや学習のポイントが終末に残っている。他教科の板書と考え方は基本的に同じで，使うものも一緒の部分が多いです」と述べる。相違点については，「音楽科の板書は，使っている言葉が感覚的なものが多い言語だけど「ふわふわ」と言っても，イメージしていることは違うふわふわだから，どんなふわふわかを聞いて，イメージの言葉が派生する，こっちに近いぞとか広げたり収束させたり，一つの言葉で終わらないイメージに合う具体物が効果的な場合には板書に生かしたりすることです。」と述べる。

教員βは，共通点について，「1時間の流れが分かる板書にすることだと考えます。」と述べる。

教員γは，共通点について，「社会科でウェビングを使っている先生がいらっちゃって，私がやっている音楽科の授業と似たような感じでした。数学科とかは図形とかグラフとか

ICT を活用する先生が増えているので、音楽科で言ったら楽譜を提示したりするのと似ているのかなと思います。」と述べる。相違点については、「板書の量が、生徒が板書を書く量が他教科はものすごく多く、（書くことに）追われる生徒がいて、（中略）生徒の考えが残って行くけれど、板書の量が多すぎて消されることがあります。」と述べる。

最後に、校種間の違いについて、小学校と中学校の両校種を経験した教員Yは以下のように述べる。

小学校と中学校の板書について、「（構成要素は）そこまで大きくは変わらなく。でも、やはり補足する部分が中学校は多いというか、どれだけ子供たちが小学校でやってきたかにもよるので、結構、補足の資料が増えたと思います。とりあえず、どこでつまづくか分からないので、色々な資料を用意しておきます。」と、板書の構成要素や記載している内容についての違いはないが、小学校での板書に比べ、提示する資料が増えていることについての回答があった。

#### 4.3 掲示物や ICT と板書との連携について

小学校の音楽科学習での掲示物と板書の連携についての具体は、板書と同様、音楽之友社（2023）『教育音楽小学版 11 月号』の特集記事から、多くの教員の指摘が確認できる。

石上（2023）は、「掲示物は学習環境そのものだと私は捉えています。」（p.22）、「音楽室の中には、本時の授業に関係するものを掲示します。例えば、音楽づくりの授業をする際には、構成表などをホワイトボードに掲示したり、楽典的な内容を取り扱うには、音楽記号の掲示をしたり、今月の歌の歌詞を掲示したり……。」（p.23）、「学習が進めやすいように、子どもが何をすればいいか分かるような掲示にしてあげたいですね。」（p.23）と述べ、「学習環境を整え、その日の授業がスムーズに流れるような掲示の在り方や板書の書き方は、教師にとって必要なスキルです。それは PowerPoint などの ICT になってもおなじだと思います。（中略）そういった活用のすみ分けとそれらの併用もこれから求められるのではないのでしょうか」（p.23）と指摘している。

齋藤（2023）は「「板書や掲示物は必要最低限に！」これが私の授業づくりで大切にしていることです。情報量が多くなると今、何を学んでいるのか、何をすべきなのかがぶれてしまうからです。」（p.34）と留意点について指摘している。

根本（2023）は「音楽記号や〔共通事項〕、音楽づくりのヒントなどの知識に関するものは音楽室の壁に常時掲示しています。（中略）子どもたちも掲示物やその場所を覚えるから、「困ったらあそこを見ればいい」と、学習のヒントを探すのです。」（p.36）、「授業中に子どもたちから出てきた「音楽を表す言葉」も拾い、それらも掲示物として残して掲示しています。（中略）言葉にできない子どもにとってヒントにもなります。」（p.36）と述べる。また、留意点として、「子どもによっては気になってしまう場合もあるので、授業で私の定位置になっているピアノの周りには掲示等はしないようにしています。」（p.36）と述べる。

小学校の ICT と板書の連携について、平野（2023b）は、「板書したことを「まなびポケット」（学びのプラットフォーム）にアップすることを続けています。そうすることで、子どもたちが学校でも自宅でも、自分のタイミングで「今日の授業」にアクセスすることが可能になります。」（p.25）と述べる。

中学校の音楽科学習での掲示物の具体は、清水（2022）の記載が確認できる。清水は、音

楽の学びにつながる5つの掲示物として、「(1)板書の一番上は、「今日の目標・ねらい」の掲示物」「(2)毎回授業で使う板書用の掲示物」「(3)授業展開に必要な掲示物」「(4)教室の壁に貼る掲示物」「(5)音楽室の廊下に貼る掲示物」と整理している。「(2)毎回授業で使う掲示物」として、「授業の柱となる今日の授業、導入、今日のメイン、まとめ、今日のポイント」というカードを、ラミネート加工して裏面にマグネットを付けて作成しておくとう便利です」「要素カード」は、赤字にしてマグネットを付け、黒板の右に常時貼っておきます。」

「細分化した「具体カード」を作り、いつでも利用できるようにホワイトボードに貼っておくと便利です！」(p.18)と述べる。「(3)授業展開に必要な掲示物」については、「①その日の授業に必要な「キーワードカード」「②発問カード」(p.18)「③授業に関連ある「写真」や「映像資料」,「イラスト」,「図」,「④活動の手順を書いた「活動ボード」や「協働ワークボード」「⑤「歌詞カード」や「楽譜・ワークシート」などの拡大掲示物」(p.19)について述べている。「(4)教室にはる掲示物」としては、「①教師の音楽モットー」「②教育目標や音楽の時間の目標」「③評価の観点と音楽の授業で身に付く力」「③各学年の音楽レパートリー」「⑤用語や記号、リズムパターン、曲想を表す形容詞、(中略)などは、コーナーを設けて必要な時に掲示」「⑥作曲家の肖像画」(p.20)を挙げている。「⑤音楽室の廊下に貼る掲示物」として「①生徒の作品」「②授業風景の写真や、ワークシートや授業のまとめを模造紙に貼ったもの」(p.20)を挙げている。

次に、音楽室の掲示資料や板書との関連についての3名の教員のインタビューの結果を以下に述べる。

教員αは、「両方の視点は必要だと思っていて、ずっとそこにあるというものは目に入る環境としてあった方が良く考えています。電源を入れないとその言葉に触れないということであれば、そこは見に行かないと触れることはできないわけだから、音楽室の掲示資料であったり板書から残ったものは紙とかでそこにあったりすることは大事なことです。だけど、その場所にこだわらず、それを持って青空の下で(授業を行うなど)デジタルがあることで(場所を選ばずに)音楽の授業ができることは有意義だと考えます。」と述べる。

教員βは、「現在、行っている方法がそのまま行われているのがよいと考えます。」「学習の成果については教室内に掲示したり板書に生かしたりすることはあると考えます。」「今後も黒板の板書は必要であると考えます。」と述べる。

教員γは、「中学校は、特別教室がある教室は音楽室とか、教科担任制なので、国語や数学などは学習の記録が(教室に)残せないじゃないですか、せっかく音楽室っていう特別な場所というか。だから音楽室に来たなっていうことが楽しみになるような掲示なども作っていかれたらと思っています。自分の考えを掲示してもらった生徒は〈あ、自分のだ〉とかいって、結構嬉しそうにしているので、(音楽室へ)くるのが楽しみになるような掲示ができたと思っています。」「板書自体はこれからもそこまで変わらないと思います。」と述べる。

次に、3名の教員は、電子黒板やデジタル教科書などと板書の関連について以下のように述べる。

小学校教員αは、「パッと音楽が流せたり部分的に音楽を聴かせたりすることができる、鑑賞だと音楽のどのくらいの部分を聴いているということは、デジタル教科書だと示せる、音楽が目に見えるようになったなと思っています。一人一人の手元にあるので、聴きたい場所を自分で聴くことができるということはこれまでより良くなったと思います。一方、もっ

と使いこなすにはどうすれば良いかわからないままやっていると感じています。書き込んだものがワークシートみたいに残っていく、ミライシードを使っていますが、（ワークシートや学習成果物を）無くしたということもなくなり良かったと思います。」と述べる。

中学校教員βは、「楽譜の掲示は、デジタルや ICT 機器活用は大変便利です。しかし、（黒板への）板書については、時代が変わっても、内容としては、あまり変わらないのではないかと考えます。」と述べる。

小学校教員を経験した中学校教員γは、「生徒の考えを共有したいときは、いつもロイロノートの提出箱に提出させているので、（操作をしながら）こうやって名前を隠すこともできたりするんです。電子黒板にこれを映して、誰が提出したか、していないかも一発で分かる、結構、創作の作品の発表の時は、黒板に出しながら発表させるので便利です。ワークシート等をそのまま映すことができるので、基本的に紙は使ってないんです。創作も今は紙を使ってなく、そのままパッとこうやって出せるので。これは、生徒に送った資料ですが、全部こういうふうに出せるので、結構便利だなって思っています。」「これまで掲示していたものは紙ではなくロイロノートで配布するようになりました。楽譜に書き込んで拡大印刷しなくてもこうやって付箋を貼っていけるので、これは結構便利だと思います。あと、これからちょっと使っていきたい思考ツールがあって、鑑賞で共通性とか固有性が学習指導要領に載っているの、ベン図なども使っていきたいと思っています。」と述べる。

3名共に、ICTを活用しながら、板書で行ってきたことが代替できるものは移行し、そうでないものは継続して行っていることについての回答が得られた。

## 5 考察

「1. 板書を活用する技能の習得」で行った調査において、3名の教員に共通することとして以下の内容が挙げられる。

- ① 大学や教育実習において、音楽科学習の板書指導はなかった。
- ② 中堅者以降に自身の板書が変わった端緒となる出来事（研究授業の実施や指導助言〈研修〉、音楽科や他教科の授業参観〈校内研修・研究〉、音楽を形づくっている要素の意識化〈学習指導要領の改訂〉、一人一台端末の導入〈GIGA スクール構想〉、小学校教員の場合は音楽専科の経験〈転勤、校内人事〉、教育実習生への指導〈教員としての立場の変化〉）があった。

以上の内容の中で、中学校教員βの述べる教員7年目（三校目）での国語科や社会科の授業参観の経験が、自身の板書に影響を与え、1時間の授業の流れを表したり、矢印の太さや色にこだわって作成したり、図として表したりすることにつながったことは、他教科の板書を活用した学習指導が、音楽科の学習においても活用できる部分があると同時に、他教科を含む他者の授業を参観して自身の授業を省察し、板書を活用した学習指導の改善につながっていることを示していると考えられる。

同様に、教員γは、教員として働く以前に小学校の授業を参観する機会を得たことで、その時に音楽科の板書の構成要素について把握し、初心者期からある程度の板書計画を意識しながら ICT を活用した授業を実践することにつながっている。このことから、他者の授業を参観する機会を持つことは、自身の板書を活用した学習指導だけでなく、授業の在り方自体についても考える機会となっていることから、大学卒業前や教員としての初心者期

において、授業参観の機会を持つことが重要であると考え。例えば、この時期において鳴門教育大学が示す「授業構想力評価スタンダード 音楽科【詳細バージョン】」は、板書（方法・内容）について、実習前、実習後、卒業後の基準が記載されていることから、教職課程や教育実習指導においてはこのような指標を用いて自身の授業を省察したり他者の授業を参観したりすることは、学生や若手教員の授業改善について有効な手立てとなるであろう。

また、3名の教師にとって学習指導要領の改訂や GIGA スクール構想などの教育の転換点は、教員の板書を活用した学習指導の在り方が変容する一つの要因となっており、このような時期においても積極的に教員間で授業参観の機会を持つことが、教員が板書を活用した学習指導をどのように行うのかについて、各々の教員に影響を与えることにつながると考える。

「2. 板書の構成要素」については、書籍等の調査や教員のインタビューの中でも「可視化」という言葉が多く使われていた。この可視化には〈1時間の授業全体の流れが把握できる可視化〉があり、これまでの調査内容から、〈題材の目標や本時のねらい（めあて、学習課題）の提示〉〈教材曲の情報（作詞者、作曲者、楽譜など）の提示〉〈楽曲自体の構成などの情報（楽譜、リズム譜、図など）可視化〉〈音楽づくり・創作では設定した条件などの提示〉〈児童・生徒の考え（思いや意図）やその変容の可視化〉〈音楽を形づくっている要素との関連の可視化〉〈学習課題に対応したまとめや振り返り〉などによって構成されていると言えるだろう。

また、1時間の授業全体の流れが把握できる可視化としての板書の中でも、表現的板書としての〈児童・生徒の考えやその変容の可視化〉は、教員や授業内容によってその方法は様々である。この点においては、黒板への板書だけでなく、ワークシートや拡大楽譜、思考ツールの活用、端末で記入した学習成果物を電子黒板で共有するなど様々な方法が用いられているため、今後も実践事例の共有が必要であると考え。

平野(2023a)は、「板書をするのが目的ではないことを強調したい。（中略）歌う、聴くなどの活動量が低下することも念頭におく必要がある。私は、領域や分野の特性、そして、学習内容に応じて、効果的に板書を取り入れているところだが、「あえて書かない日」があってもよいと考えている。」(p.23)と述べている。これは、教員βの「歌唱の授業ではあまり板書を行いません。」の回答に共通する点である。大西も同様に、「板書は授業のすべてではない。いくら構成的板書が板書の花だといっても、それは授業の一部であり、授業の他の要素に比較すると二次的なものにすぎない。」(p.137)と述べていることや、鳴門教育大学による「授業構想力評価スタンダード 音楽科【詳細バージョン】」でも板書が授業展開力の下位能力と示されていることから、音楽科の学習指導において、板書の活用がその時間において効果的な手立てとして機能するかどうかを教員自身が十分に検討して授業を行うことが必要であると考え。

領域や分野による共通点として、3名の教員からは、1時間の流れが分かる板書について意識していることの回答が得られた。このことは、他教科との共通点として3名の教員からの言及があったことや、佐藤、米山、水門、堀川の記載から、板書を活用した学習指導を行っている教員においてある程度共通に意識されていることであると考え。また、音楽を形づくっている要素については、3名の教員や清水がカードを作成し、曲想と関連付けながら指導を行っている実態があった。

領域や分野による相違点としては、創作（音楽づくり）分野において、インタビューを行った教員αや教員γが設定した条件を提示することについて述べていることが挙げられる。また、鑑賞領域における楽曲全体の構成を表す記載として、小島による聴き取ったことをまとめる表や拡大楽譜の活用、米山による中央に聴き取ったことや感じ取ったことを書くこと、教員αによる旋律図や音楽の構成を図の活用、教員βによる図5の思考ツールの活用、教員γによるベン図の活用の示唆など、表現領域に比べ、より楽曲全体をどう可視化するかということと、楽曲を通して聴き取ったり感じ取ったりしたことをどう可視化するかということが意識された板書を行っている点が特徴である。

教科間の共通点について、音楽科の学習指導に関わらず、1時間の流れが分かる板書を行うことはある程度意識されていることである。また、教員γは他教科で行っているウェビングなどの思考ツールも音楽科の学習でも活用が可能であることについて言及していることから、板書を活用した学習指導に思考ツールを活用することも増えてくるのではないかと考える。

「3. 掲示物や ICT と板書の連携」の掲示物の事例としては、清水や3名の教員は、黒板に貼るカードを活用した授業の実践を行っている。カードには、主に授業の進め方に関わるものと音楽を形づくっている要素に関わるものがある。清水が示す「今日の授業」<sup>1</sup>、「導入」<sup>2</sup>、「今日のメイン」<sup>3</sup>、「まとめ」<sup>4</sup>、「今日のポイント」<sup>5</sup>などのカードは、1時間の授業の流れを可視化することに有効であると考ええる。音楽を形づくっている要素のカードは、特に大坪らが述べる《思考の補助》《思考の整理》《見やすさ》に関連し、聴取対象や本時の学習で中心となる要素を焦点化し、学習指導要領が述べる音楽的な見方・考え方を働かせることにつながる教材となる。

ICT と板書の連携の事例については、石上が述べる活用のすみ分けは既に3名の教員も行っており、教員αは鑑賞時の楽曲の可視化や学習記録の蓄積、教員βは楽譜の提示、教員γは創作作品の共有や楽譜への記入を行っている。また、平野の板書による学習記録の蓄積も含めて、一人一台端末の環境整備によって実現可能となったことであると考ええる。インタビューを行った3名とも板書の良さと ICT の良さを併用しながら授業実践を重ねていることが特徴として挙げられるため、音楽科の学習指導において、何を板書し何を ICT で行うのかについては、学習効果と合わせて検討していく必要がある。

## 6 今後の課題

本研究では言及できなかったが、板書を行う音楽室環境の違いによって、板書に何を記載するかは異なるという課題がある。各々の教員の勤務先の音楽室の学習環境によっては黒板が全く教室にない環境も考えられ、移動黒板一面、ホワイトボード一面、黒板一面、上下式黒板二面、教員γが示す上下式黒板四面、五線が描かれた黒板がある事例、電子黒板との併用など、各々の学校の音楽室の板書に関わる学習環境は様々であることから、主に黒板一面で示される他教科の学習指導とは異なり、音楽科においてはある程度の板書の構成要素は示すことはできても、どの領域や分野の活動にも通じる共通した板書の型を示すことが難しい実態がある。

また、今回調査した3名は学校種や教員としての教職歴は異なるものの、同性であること、同じ X 県内で働いていること、普段から板書を活用した授業を行っていること、3名とも

に研究者とのラポールがあったことから、必ずしも国内の音楽教育に関わっている教員全体の考えや、学校で行われている板書を活用した学習指導の実態を示すものではないと考える。

さらに、教員へのインタビューから、板書を活用した学習指導の端緒となっていた授業参観を含めた研修や研究会、指導助言を受ける機会については地域による差異もあることや、個々の教員によっても音楽の学習指導で板書を活用した指導の必要性についての考えに違いがあるだろう。しかし、教員αが述べる「子供達は何もない状態では学習を振り返りづらい」「黒板に貼ったものや書いたものを指し示すことで、〈ああ、そうだった〉と子供達が学びの足跡に納得し、学習したことを板書の力でより意識化できることが分かりました」という言及は、音楽科においても板書を活用した学習指導が必要な理由と言えるのではないかと考える。今後は、GIGA スクール構想で普及した一人一台端末の効果的な活用がその代替としての役割を果たすことも期待できる。いずれにしても、児童生徒の学習成果や作品、思考の変容の記録は、端末を有効に活用することで可視化することが可能な環境になっているが、学級全体の成長や学習の記録の可視化においても、板書を活用した学習指導は現在においても有効な手段の一つであると考ええる。

教員γの事例のように大学在学中の授業参観や、初心者期の授業参観は、その後の板書を生かした授業を行うことに影響を与えることが考えられる。特別の教科 道徳では、文部科学省が「道徳教育アーカイブ」ホームページにおいて、「「考え、議論する道徳」の授業づくりの参考となる工夫のポイントを、実際の授業の映像と授業者へのインタビューを通して紹介します」と記載され、2024年10月時点で、小学校20事例、中学校13事例が確認でき、それぞれの教員の板書を活用した指導の動画を視聴者（学生や教員）はいつでも閲覧できる環境にある。音楽科学習においても、他者や他教科の授業参観が、自身の板書を活用した学習指導を省察したり、授業の改善につながったりするのであれば、このような授業動画を自由に閲覧できる機会や場を設定したり、教科用図書の教師用指導書などに板書例を示したりすることが、音楽指導に困難さを感じている学生や教員にとって、日々の授業改善に向けて望ましい環境になるのではないかと考える。

## 参考文献

- 文部科学省（2018a）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東洋館出版社。  
文部科学省（2018b）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』教育芸術社。  
文部科学省（2018c）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』あかつき教育図書。  
文部科学省（2018d）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』教育出版。  
大西忠治（1987）『授業づくりの上達法—だれも語らなかった基礎技術』民衆社。  
佐藤浩章（2017）『シリーズ 大学の教授法2 講義法』玉川大学出版部。  
大坪治彦・東畑貴昭（2012）「教師の板書計画とノート指導に関する一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第63巻，鹿児島大学，pp.107-119。  
長島真人（2009）「音楽教師に期待される資質・能力の広がりや深まり—音楽科授業実践力評価スタンダードの構想—」『学校音楽教育研究（13）』日本学校音楽教育実践学

- 会, pp.200-201.
- 鳴門教育大学「授業構想力評価スタンダード 音楽科【詳細バージョン】」[https://www.naruto-u.ac.jp/05\\_kyoumu/0555\\_gp/pdf/standard/ongaku\\_syosai.pdf](https://www.naruto-u.ac.jp/05_kyoumu/0555_gp/pdf/standard/ongaku_syosai.pdf)(2025年2月27日)
- 熊倉佐和子(2024)「小学校鑑賞領域の交流場面の手だてに関する考察:現職教員との板書の検討から」『淑徳大学教育学部・経営学部・地域創生学部研究年報(7)』淑徳大学教育学部・経営学部・地域創生学部, pp.59-71.
- 平野次郎(2023a)「音楽科の板書は「書く」ではなく,「置く」を意識する」『教育研究』第78巻第5号, 初等教育研究会, pp.20-23.
- 平野次郎(2023b)「音楽科を視覚化・構造化・共有して,子どもの気付きや考えを深める板書」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.24-25.
- 米山陽子(2023)「板書は教師と子どもとの「1時間の学びの足跡」」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.26-27.
- 佐藤幸子(2023)「児童が何を学んだのか振り返られる板書に」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.28-29.
- 水門美穂子(2023)「音楽を図形にして可視化し,子どもの理解を深める板書」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.30-31.
- 堀川結華(2023)「みんなが音楽を「分かる」ための板書」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.32-33.
- 石上則子(2023)「なぜ,板書と掲示物は大切なのか」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.22-23.
- 齊藤英里香(2023)「みんなが分かる!知識の定着を積み重ねる掲示物」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.34-35.
- 根本潤子(2023)「掲示物は子どもの学習や気持ちに寄り添うもの」『教育音楽小学版』第78巻第11号, 音楽之友社, pp.36-37.
- 清水宏美(2022)『これでできる!音楽科の授業づくり すぐに使える指導案・ワークシート事例集』音楽之友社.
- アイヴァー・グッドソン, バッド・サイクス(著) 高井良健一, 山田浩之, 藤井泰, 白松賢(訳)(2006)『ライフヒストリーの教育学 実践から方法論まで』, 昭和堂.
- 高見仁志(2011)「小学校音楽科における教師のライフヒストリー:教師の力量形成の構造と要因」『日本教科教育学会誌』第34巻第2号, 日本教科教育学会, pp.31-40.
- 初等科音楽教育研究会(2020)『最新 初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠』音楽之友社.
- 小島律子(2018)『三訂版 小学校音楽科の学習指導 生成の原理による授業デザイン』廣済堂あかつき.
- 有本真紀・阪井恵・津田正之(2021)『新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社.
- 高見仁志(2018)『新しい小学校音楽科の授業をつくる』ミネルヴァ書房.
- 齊藤忠彦・菅裕(2019)『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』教育芸術社.
- 文部科学省 道德教育アーカイブ「特別の教科 道德」の全面実施 <https://doutoku.mext.go.jp/> (2024年11月18日)

## 《実践報告》

### 『ちいさな秋の音楽会～アニマート’17からの贈り物～』振り返り報告

蒔田 裕香<sup>1</sup>      橋本 朱音<sup>2</sup>      中西 悠<sup>3</sup>

#### 1. 開催に至るまでの経緯

筆者の卒業した2020年度はコロナウイルスによる活動制限があり、卒業演奏会には出演者の家族や大学関係者のみが招待を許可されていた。制限のあった卒業演奏会は小さな心残りとなっており、卒業後に筆者らで会うたびにいつか演奏会を開きたいといった話をしていた。

この話がひとつ先に進めたのは、卒業とともに上京していた中西が2024年の春ごろに静岡県に戻ってくるという話があったからである。中西はシンガーソングライター『はるかぜ』<sup>4</sup>として活動しており、ライブを主催した経験があった。そのため、演奏会の内容・日程の決定、会場のキャパシティや・予算の算定、それに伴う会場決定と仮押さえ、チケットやフライヤーの作成、SNSを活用した広報等といった演奏会の開催を実現するための準備を早い段階で進めることができた。

#### 2. アニマート’17とは

アニマート’17は常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻（現：学校教育課程音楽専攻）を2020年度に卒業した同期で結成した団体であり、活動名は大学時代に同期で合唱をする際等に使用していた。アニマートとは、音楽用語で「元気に」「生き生きと」といった意味を持ち、当時の自分たちの雰囲気と合っていたため活動名として使用することになった。

今回の主催者は本報告書の執筆者である蒔田、橋本、中西の3名である。蒔田は合唱団やミュージカルオーディションでのピアノ伴奏や幼児や児童を対象としたピアノ指導を行っている。橋本は結婚式場での聖歌隊やオペラ公演への出演などの活躍がみられる。中西は会社員として働きながら、シンガーソングライターとして活動している。

ほかのメンバーは卒業後にほとんどが教職の道へ進んでおり、多忙な中で音楽を続けているメンバーも少なくない。今回同期11名のうち8名が参加を決めた。

#### 3. スケジュールについて

3月の初回打ち合わせ時に、本演奏会を実施するためのスケジュールを立案した。表1は実際に演奏会に向けて動いたスケジュールである。

表1 演奏会実施のためのスケジュール

| 月  | 作業内容                     |
|----|--------------------------|
| 3月 | 初回打ち合わせ、会場選定、企画書作成、参加者募集 |
| 4月 | 参加者決定、会場下見①、会場確定、推定予算算出  |

<sup>1</sup> A's STUDIO ピアノ講師、劇団ぱんけーき所属。

<sup>2</sup> 医療事務員、静岡市内の聖歌隊に所属。

<sup>3</sup> 会社員。総務部経理課所属。シンガーソングライター「はるかぜ」としても活動。

<sup>4</sup> 中西悠のシンガーソングライターとしての活動名。静岡県を中心にライブ活動を行う。

|     |                                                      |
|-----|------------------------------------------------------|
| 5月  | プログラム確定                                              |
| 6月  | タイムスケジュール作成, チラシ要綱作成                                 |
| 7月  | チケット作成, 会場下見②, 合唱練習①                                 |
| 8月  | 当日パンフレット作成, スタッフ関連資料作成, SNS 運用開始, 合唱練習②<br>(台風により中止) |
| 9月  | 予約開始, 当日パンフレットの印刷所と連絡開始, チラシ入稿, 合唱練習③                |
| 10月 | 江崎ホールの HP にて告知, 合唱練習④                                |
| 11月 | 当日パンフレット印刷, 予約管理, ゲネプロ・合唱練習⑤ (11/24), 本番             |

立案したスケジュール通りに動くために、主催側では2週間～1ヶ月に1回程度打合せの時間を設けた。チラシ作成や当日パンフレットの印刷等、外部とのやり取りが必要なものについては当初立案したものから後ろ倒しになったが、他は初回打ち合わせ時のスケジュール通りに動くことができた。

#### 4. 演奏会の曲目について

今回の演奏会では、演奏会に普段足を運ばない方もターゲットとしたいという目標のもと企画を行い、第一部をクラシック楽曲のピアノ独奏や連弾、声楽独唱とし、第二部をポップス楽曲のアンサンブルや合唱とする二部構成の演奏会とした。

第一部について、ひとりあたりの持ち時間を10分以内とし、来場者になるべく飽きずにクラシック楽曲に触れられるよう、ピアノと声楽の順番を設定した。第二部について、楽曲や演奏形態の制限を設けずに募集したところ、ピアノ連弾やピアノ弾き語り、オーボエピアノアンサンブル、声楽アンサンブルが集まった。

合唱について、今回は県外からの参加者もあり、企画段階で合唱練習は5回程度の実施になると見込んでいたため、学生時代に演奏した「君が君に歌う歌」<sup>5</sup>を軸にして取り組むことにした。「君が君に歌う歌」は卒業演奏会で演奏しており、授業内で楽曲分析も行っていたため、練習をスムーズに行うことができた。もう一曲は、多くの中学校や高校で歌われてきており、一般的な知名度が高いことが決め手で「虹」<sup>6</sup>にすることにした。演奏会プログラム資料を本稿末に掲載する。

#### 5. 演奏会を実施するための事務作業について

今回、当日までの事務作業を主催者である蒔田、橋本、中西の3名で遂行した。作業分担について、蒔田はスタッフ関連作業、予約管理、橋本は参加者のスケジュール管理や会場責任者、中西はパンフレット作成、メール問い合わせ、アナウンス原稿の作成とした。

本演奏会ではSNSを使用した宣伝や出演者による声がけによって集客を行った。予約方法として、Google Form を利用し、スプレッドシート上で予約管理を行った。

打合せも含む、総作業時間は70時間ほどであった。また、次回以降は今回作成した作業マニュアルやタイムスケジュール等のひな型を流用していけるため、作業時間を減らしていけるのではないかと考えられる。

<sup>5</sup> NHK 出版, Elvis Woodstock 作詞, 大島ミチル作曲

<sup>6</sup> NHK 出版, 森山 直太郎, 御徒町 颯作詞・作曲

## 6. 当日の様子

当日は予約なしで来場された6名を含む109人の方にご来場いただいた。企画発足時は来場者数70名を目標にしていたため、予想よりも多くの方にご来場・応援いただいていることを肌で体感することができた。今回の演奏会は舞台と客席との距離感も近かったため、演奏をするたびにお客様の暖かい反応を感じ、とても演奏しやすい環境であった。今回は誰でも気軽に楽しんでもほしいという点に重きを置いて演奏会を開催したため、来場者アンケートをとらなかったが、終演後のお見送りの時間では「ステージ構成や曲の長さから飽きずに楽しむことができた」、「ライトさもありつつ、クラシックも楽しめる見やすい演奏会だった」等といった、演奏以外の構成に関する感想も多くいただくことができた。

出演者には演奏会終演後にGoogle Formを使用し、任意でのアンケート調査を実施した。設問①『11/30 演奏会に参加した感想を教えてください』では、「また同期と集まって合唱／演奏会ができてよかった」「音楽の楽しさやすばらしさを再認識した」といった意見が多くみられた。また、「普段指導者の立場にいるメンバーも、指導ではなく学ぶ側の立場に久しぶりに立ち返ることができた」といった教員ならではのポジティブな意見も寄せられた。しかし、仕事や練習、企画運営との両立の難しさや、集客への不安など、社会人の傍ら活動をする上でのネガティブな意見も寄せられた。設問②『また参加したいと思いますか(はい・いいえ・わからない)』では、回答者全員が「はい」と回答した。

## 7. まとめと今後の見通しについて

プログラム構成をするという経験は、これまで勉強してきたクラシック音楽や合唱を軸に幅広い方に楽しんでいただくことについて考えるきっかけとなった。クラシックの中でも聞き馴染みのある曲を選ぶことや、誰もが聞いたことのあるポップス曲を選んだことでお客様により親しみを持って聴いていただけたと感じた。

社会人になってこのような活動が出来たことは自身の成長や自信にも繋がった。出演者へのアンケート調査の結果からもわかる通り、仕事との両立は難しい場面もあったが、この演奏会が貴重な演奏発表の機会になったこと、仲間とともに音楽を奏でる喜びを再認識する場になったことが分かり、主催者としても演奏会を開催した意義を感じることもできた。

今回の演奏会時には、会場前のエレベーターホールが混み合ってしまう開場を早めることになるといったトラブルも発生したが、たくさんの協力があり演奏会を成功させることができたと感じる。今後もこういった演奏会活動を行っていきたいと考えている。社会生活と継続していくために、演奏会を実施する頻度や形態、作業分担などを精査していきたい。

### 執筆分担

蒔田 裕香：1－7（2，3，4，5は筆頭執筆）

橋本 朱音：7（1，2，3，4，5，6は執筆協力）

中西 悠：1，6（2，3，4，5，7は執筆協力）

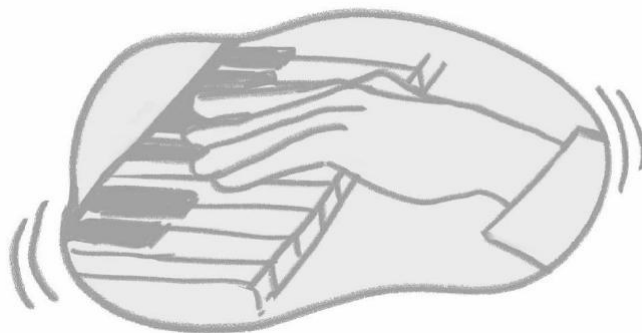
資料1：当日パンフレット

常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻

2020年度卒業生主催

# ちいさな秋の音楽会

## ～アニマート'17からの贈り物～



2024年11月30日(土)

開場 13:00 開演 13:30

¥ 1,000 全席自由

江崎ホール

(〒420-0035 静岡県静岡市葵区七間町 8-20 毎日江崎ビル 9 階)

— 1部 クラシックステージ —

1. ピアノ独奏

三井 愛佳

ユーモレスク

A.ドヴォルザーク

愛の挨拶

E.エルガー

2. ソプラノ独唱

中西 悠 (伴奏：監物咲音)

おんがく

作曲：木下 牧子

作詩：まど・みちお

未知の扉

作曲：中田 喜直

作詩：宮本 正清

木犀のセレナーデ

作曲：湯山 昭

作詩：関根 榮一

3. ピアノ独奏

蒔田 裕香

メヌエット 口短調

滝 廉太郎

憾

滝 廉太郎

華麗なる円舞曲 作品 34-3

F.ショパン

4. ピアノ連弾

監物 咲音・三井 愛佳

ピアノ協奏曲 第2番 第1楽章

S.ラフマニノフ

5. ソプラノ独唱

橋本 朱音 (伴奏：蒔田 裕香)

アヴェ・マリア

P.マスカーニ

歌劇〈蝶々夫人〉より「ある晴れた日に」

G.プッチーニ

— 2部 ポップス・合唱ステージ —

1. ピアノ連弾

田原 かのん・蒔田 裕香

名探偵コナン～メインテーマ～

大野 克夫

2. ピアノ弾き語り

中西 悠

ノンフィクション

作詞・作曲：はるかぜ

3. オーボエ・ピアノ三重奏

田原 かのん・中西 悠・蒔田 裕香

人生のメリーゴーランド

久石 譲

4. 声楽アンサンブル

岩城 真実花・玉城 菜々子・中西 悠

橋本 朱音（伴奏：三井愛佳）

映画「天使にラブ・ソングを…」より  
Hail Holy Queen

作詞・作曲者不詳  
編曲：M.シャイマン

Jupiter

作曲：G.ホルスト  
作詞：吉元由美

5. 女声三部合唱

虹

作詞・作曲：森山直太郎・御徒町風  
編曲：信長貴富

（伴奏：田原かのん）

君が君に歌う歌

作曲：大島ミチル  
作詞：Elvis Woodstock

（伴奏：三井愛佳）

## 出演者紹介



橋本 朱音    蒔田 裕香    田原 かのん    岩城 眞実花  
三井 愛佳    中西 悠    監物 咲音    玉城 菜々子    (順不同)

### ～ アニマート'17 について ～

アニマート (Animato) とは、クラシック音楽に使われる速度記号の中のひとつ。イタリア語で「元気に」「生き生きと」といった意味を持ち、楽曲のイメージを表す曲想記号としても用いられる。そんな音楽用語にインスピレーションを受け、常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻に 2017 年に入学した同期で活動する際の団体名として『アニマート'17』と名付けた。現在は教職員や学校事務職員など、県内外の教育現場で働いているメンバーが半数を占める。

### — 主催メンバー紹介 —



橋本 朱音

静岡県立清水南高等学校芸術科を経て、常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻卒業。第 37 回静岡県学生音楽コンクール声楽部門高校生の部第 1 位並びに静岡県オペラ協会会長賞・第 11 回ペーテン音楽コンクール自由曲コース大学・院生 A 声楽部門第 4 位・第 1 回常葉みらいコンクール奨励賞受賞。これまでに廣木悠代、百瀬美樹、佐藤典子の各氏に師事。現在は静岡県内で活動。



蒔田 裕香

常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻卒業。これまでに石田治子、稲田礼子、小池充子の各氏に師事。ピティナピアノコンペティション、静岡ピアノオーディションでの受賞歴がある。音楽外では、静岡市内で活動する「劇団ばんけーき」に所属しており、劇団オリジナルソングの作曲を担当している。ミュージカルや演劇活動など広く芸術に携わり、現在は健やか会コーラスの伴奏を務める。



中西 悠

常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻卒業。これまでに佐藤典子、田代和久の各氏に師事。学生時代から現在に至るまで、シンガーソングライター「はるかぜ」として活動している。ライブはピアノ・ギターの弾き語りスタイルで行う。自身の活動のほか、コープ共済公式キャラクター「こーすけ」の絵描き歌の歌唱や、その他企業 CM やサウンドロゴの歌唱なども務める。

## 《書評》

久保田慶一 著

14 歳からの新しい音楽入門——どうして私たちは音楽が必要なのか——  
(東京：株式会社スタイルノート 2021 年 7 月 159p. 本体価格 1,600 円  
ISBN978-4-7998-0193-2)

三沢 大樹<sup>1</sup>

### 1 はじめに

一般に音楽の入門書といえば、楽典や音楽理論の解説・参考書を思い浮かべる人が多いと思うが、本書は「音楽学」の魅力を、中学生や高校生に対して易しく伝える入門書として位置付ける方が、その印象と合致する。著者は本書の執筆動機について、我が国の小学校中学校では音楽の学習が義務教育で行われており、中学校や高等学校の課外活動では合唱や吹奏楽等の音楽活動に専念している生徒も少なからずいるにも拘らず、「大人になってからも音楽活動を継続している人の人数が、極端に少ない」(p.2) こと、そのひとつの答えとして「音楽活動を中学校や高等学校での活動に限定してしまって、自分自身の『生涯学習』の一部として理解する土壌が育っていないからではないか」(p.2) ということに到達したこと、その上で「今現在、学校で音楽を学んでいる人、特に、課外活動や部活動としての音楽活動に熱心に取り組んでいる人のために、卒業後も、そして大人になってからも、音楽を継続してもらいたい、あるいは音楽のよき鑑賞者になってもらいたいという思いから、執筆しました」(p.2-3) としている。

本書を取り上げた批評は少ないが、イトウ(2021)は「そもそも音楽とはどういうものなのか。なぜ私たち人間には音楽が必要なのか。この哲学的とも言える問いの答えを、やさしい言葉で中学生や高校生にも分かるように説明してくれる」と評している。これについて具体例を挙げると、著者は序章(セクション0)の冒頭から、「音楽とは何だろうか?」という問いに対して、「あなたにとって音楽とはどのような存在ですか?」(p.8)「音楽は何からできていますか?」(p.8)「複数の人が同じ場所で同じ音を同時に聴いている状況を、——中略——これらの人は、『同じように』音を聴いているのでしょうか。」(p.9)と、具体的な回答を示さずに、読者に哲学的な視点から矢継ぎ早に投げかける。このような読者自身に自答をさせる切り口は非常に印象的であり、本書の特徴とも言えよう。また本書は、私たちの世界を構成する自然・人間・人間が作り出したもの、という3つの視点から音楽を説明しようとしている。

著者の久保田慶一氏は、現代日本を代表する音楽学者・音楽教育者として広く知られていることから、その功績や業績を敢えて紹介する必要は無いであろう。彼の著書は、基本的に教育的な面を持つテキストでありながら、取り扱う楽曲(音楽)の芸術的な面を崩すことなく提示しているところが高く評価できる。2021年に初版が出版され、初刷は誤植が多く若干の混乱があったようであるが、2023年に発行された第3刷では、社会動向の変化を受けて幾つかの箇所に加筆がされ、誤植もほぼ修正がされた。前述のように、本書は中学生・高校生を対象とした入門書として位置付けられているものの、音楽の専門家や教育者に対し

---

<sup>1</sup> 東海大学児童教育学部

でも、有益な情報を提供し、これからの社会における音楽とのかかわり方について何かしらの視座を得ることが期待できる良書であることから、本会の会員にとっても一読に値するものと思われる。

## 2 概要

本書の基本的な構造は、セクション1（「音と楽器」のはなし）、セクション2（「音楽」のはなし）、セクション3（「楽譜」のはなし）、セクション4（「音楽理論」のはなし）、セクション5（「音楽と社会」のはなし）の5つのセクションから成る。セクション1の前には、導入の位置づけとしてセクション0（「音楽って何だろう？」）が置かれ、また、各セクションの合間には、解説を補完したり新たな知識を提供したりしてくれる8つのコラムが配置されている。その他として、はじめに、おわりに、付録（楽典、関連音楽史年表、基礎音楽用語、今後の勉強のために）があり、全体を構成している。読者は、目次を頼りに興味のあるセクションから読み進めることも可能であるが、「セクションの各節で説明される内容は他のセクションとも綿密に関連」（p.3）しているという著者の意向を尊重して、筆者は冒頭から読み進めることをお勧めしたい。

セクション1は「音楽と自然の関係」について、5つの節（音について、音名と階名について、和音について、声種と声域について、楽器について）で説明がされる。

セクション2は国や時代によって異なってくる「音楽」という言葉について、人間が作り出した「音楽」そのものについて、4つの節（「ミュージック」という言葉について、リベラル・アーツとしての音楽について、「音楽の力」について、音楽と時間について）で説明がされ、セクション3では、その「音楽」を表したり伝えたりするために必要な楽譜について、4つのセクション（楽譜について、拍子について、テンポについて、題名について）の中で説明がされる。特に、第4節（題名について）の説明で扱われるL.V.ベートーヴェン作曲《交響曲第5番「運命」》は、次のセクション以降の説明でもたびたび登場するが、筆者による丁寧かつ簡潔で分かり易い解説は、鑑賞授業の教材研究資料としても高い価値が見いだせるものであり、一読に値する。

セクション4では、「人間は音楽をどのように聴くのか」という視点の下、4つの節（反復について、変奏について、対比について、歌詞について）で音楽理論の話が展開されている。第4節（歌詞について）を「音楽理論」の中に含めたことには、些か強引な印象を受けるものの、F.シューベルト作曲《魔王》を題材とした分析と解釈の説明の質は非常に高く、入門書の範囲を超えるものである。

セクション5では、「人間と音楽の関係」について、集団となった社会の人々にとって音楽とはどのような存在なのかという、若干壮大とも思えるテーマについて5つの節（ジャンルについて、コピーライトについて、音楽の仕事について、音楽の学習について、危機の時代における音楽）で説明がされる。

各節の説明に難解な専門用語が用いられることは無く、比較的平易な言葉で、所々に丁寧な図解を挟みながら、解説がされている。音楽理論や音楽史上の事実に関する説明についても、なるべく平易且つ丁寧な解説をするように心がけられているものの、理解が難しいと感じる場合には、各セクションに置かれたコラムの内容が手掛かりとなる場合もあるため、一旦読み飛ばしてから後に読み返してみることをお勧めする。他方で、ごく僅かではあるもの

の、専門用語を使用せず、言葉による説明を試みたことによって、説明の文章自体が理解し辛いものになっている箇所もある。特に、「楽譜」のはなしや「音楽理論」のはなしを展開する場面では、一般に難なく理解できると思われる専門用語をある程度用いながら説明をした方が、結果として読み手に理解し易い文章になるのではないか。

### 3 まとめ

本書は「中学校や高校生以上の年齢層の方に読んでもらうために書かれた音楽の入門書」(p. 2)であるものの、著者の長年に亘る研究や教育活動に裏付けられた、各セクション・節の説明(解説)は、信頼に値するものであり、音楽を専門とする教師や学生、或いはそれらを目指す高校生らに対して推薦できる良書である。他方で、音楽の入門書ではあるものの、一般的な楽典の領域を網羅したものでは無い。そのような学習を期待する読者(特に中学生や高校生)に対しては、別の書籍を当たることを筆者はお勧めする。巻末の付録には一般的な楽典の情報等が数ページに亘り掲載されているものの、不十分さが否めないからである。例えば、第4セクション(「音楽理論」のはなし)の中で、形式の説明をしているが、形式の理解には基礎的な近親調の知識や終止形(カデンツ)の知識も必要であると思われる。後者に関してはコラム7で多少触れられているものの、巻末に図解で示すなどの配慮が欲しかったところである。また、ごく一部ではあるが、第3刷においても誤植が確認される。この点については、次回の改刷りのタイミングで修正されることを期待する。

#### 引用・参考文献, 資料

イトウ ヒサエ (2021). 新刊案内 教育音楽 中学・高校版, 65(9), 83

スタイルノート (2021). 『14 歳からの新しい音楽入門』概要紹介動 スタイルノート

Retrieved January 10, 2025 from <https://www.stylenote.co.jp/0193>

## 2024 年度 事業中間報告

### 【第7回総会および第5回研究会】 2024年8月3日（土）

上記日程にて第7回総会，第5回研究会を開催しました。研究会では，ICT教育の第一人者で，現職の教員でもある小梨貴弘先生に多くの実践を交えてご講演いただきました。

#### 1. 講演・ワークショップ：

「音楽科ICTワクワク活用講座

～アナログ×デジタルで紡ぎ出す，持続可能な音楽授業～」

講師：小梨 貴弘先生《埼玉県戸田市立戸田第一小学校教諭，東邦音楽大学非常勤講師》

### 【第5回定例会】 2025年2月9日（日）

第5回定例会では，下記の通り，会員による研究発表，及び7つのグループに分かれての交流会を実施致しました。

#### 1. 研究発表

##### ①紅林 伯彦

「中学校合唱指導における指導者のわざ言語 ―その特徴と教育的価値―」

##### ②中西 悠，蒔田 裕香，橋本 朱音，（演奏発表のみ：岩城 眞実花，監物 咲音，田原 かのん，玉城 菜々子，三井 愛佳）：

「『ちいさな秋の音楽会～アニマート'17からの贈り物～』振り返り報告」

#### 2. 交流会

### 【その他】

(1)「音楽教育実践報告誌」発行について：第6号を刊行しました。

(2)「卒業生による事業・演奏会補助」事業について：今年度は，申請者がありませんでした。

（文責：明和 史佳）

## 2024 年度 卒業生 特別研究（卒業論文）題目

| 氏名     | 特別研究題目                                                                                    |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 渥美 百華  | 心を落ち着かせる音楽の分析―黙想のための音楽の作曲に向けて―                                                            |
| 稲葉 愛美  | シューベルトの歌曲に関する研究「Die Sterne」を中心に                                                           |
| 北上 麻弥乃 | 卒業をテーマとした合唱曲の作成―5 曲の分析と考察―                                                                |
| 黒澤 歌乃  | 学校現場における児童のアタッチメント形成とその教育的支援方法に                                                           |
| 鈴木 暖   | 読譜が苦手な児童・生徒のための支援の提案<br>―オリジナルフィガーノートの有用性について―                                            |
| 鈴木 晴香  | 音楽科教育の創作分野における ICT の効果的な活用について<br>―「個別学習」と「協働学習」の場面での Song Maker とムーブノート<br>を活用した授業の提案から― |
| 田川 萌夏  | 音楽授業における効果的な指導言とは―わざ言語に着目して―                                                              |
| 橋本 彩乃  | 人はどのように音楽を聴くのか<br>―標題音楽から考える鑑賞授業の在り方と提案―                                                  |
| 別府込 和奏 | J.ブラームス作曲〈スケルツォ 変ホ短調 Op.4〉における効果的な<br>ペダル使用の考察                                            |
| 松本 くるみ | 児童生徒の歌唱活動を支えるハンドサインの活用について                                                                |
| 渡邊 京香  | 中学校の合唱祭の運営について―音楽教師と学級担任の連携―                                                              |

# 「音楽教育実践報告誌」投稿規約

2022 年 9 月 21 日

## 1 応募資格

会員登録されている学生から一般会員まで、どなたでも応募することができます。尚、未入会の方は本研究学会ホームページ (<https://www.shizuoka-mes.com/>) の入会申し込みフォームから会員申請ができます。（会員資格については本学会会則をご参照ください。）

## 2 応募内容

音楽・音楽教育に関わる未発表のものを条件に、次の 5 つの領域での応募を行います。

### (1) 学術研究（論文）

教育研究，演奏解釈，楽曲分析，教育論等に関する論文で，学術研究としての形式を備え，独創性，有用性を示しているもの

### (2) 研究ノート

研究の完成度は高くないが，その前段階としてある程度まとめられたものであり，学会誌の内容としてふさわしいと認められるもの

### (3) 実践報告

教育現場での実践例や，教材研究，資料等，会員にとって有用となる報告を幅広く受け付けます。皆さんの日頃の成果を発表いただき，情報共有の場としてご活用ください。また，学校教育現場に関することに限定しませんので，演奏報告，演奏研究等，音楽に関わることであれば投稿可能です。（原稿枚数 2～8 ページ）

原稿例：

- ・ 授業提案
- ・ 授業報告
- ・ 教材研究
- ・ 演奏報告
- ・ 演奏研究 等

### (4) 書評

音楽教育や演奏論，解説，学校教育等に関する印刷物についての検討，評価，意見等

(5) 批評

演奏作品や演奏についての検討，評価，意見等

※尚，応募件数が2編より少ない場合は次号による掲載といたします。

### 3 応募規定

※ 学術研究（論文）及び研究ノート

- (1) ファイルはA4サイズ 40字 40行を規定値とし，上 35mm，下 30mm，左右 30mmの余白とします。
- (2) フォントの大きさはタイトル及び章，項目のみ 12Point で表記し，内容は 10.5Point とします。
- (3) フォントの種類は，日本字では MS 明朝体，英字では Century を基本とします。
- (4) 図表及び楽譜の大きさ指定はありません。
- (5) 文の冒頭には「抄録（要旨）」を 600 字以内にまとめて表記することとします。その際，研究内容に関わるキーワードを 5 つ以内で表記することとします。
- (6) 応募原稿枚数は，4 ページ以上，上限 20 ページ以内とします。

※ 実践報告・書評・批評

- (1) 書式の規定（ファイルサイズ，フォント指定，図表及び楽譜）は学術研究（論文）及び研究ノートに準じますが，「抄録（要旨）」及びキーワードについては表記の義務はありません。
- (2) 応募原稿枚数は，実践報告 2～8 ページ，書評・批評 2～6 ページの範囲とします。

### 4 査読・審査及び選考

応募原稿は，報告誌の発行のために設置される査読委員会〔学術研究（論文）〕・審査委員会〔研究ノート・実践報告・書評・批評〕によって選定され，掲載の可否が応募者に報告されます。掲載にあたって不適切な部分が生じた場合は，査読委員会・審査委員会より修正をお願いする場合があります。また，万一，著作権及び不適切な侵害行為があった場合は，掲載を取り下げることがあります。（尚，選定結果は発行日のおおよそ2ヶ月前に通知する予定ですが，若干の変動があることをご承知ください。）

## 5 報告誌の公開

この「音楽教育実践報告誌」は査読委員会・審査委員会を経て静岡音楽教育研究学会のホームページ上にて一般公開されます。また、掲載された論文については、以下のように取り扱うこととします。

- (1) 掲載された論文及び実践報告の著作権は、すべて本研究学会に所属します。
- (2) 掲載された論文等は、著者自身が学術、教育などの目的で使用することを承認します。

## 6 倫理に関すること

執筆にあたっては、「投稿チェックリスト」（参考：添付資料）をご覧ください、適正に研究、執筆がなされているかご確認ください。「投稿チェックリスト」は原稿提出時に併せてご提出ください。

## 編集後記

皆さまに支えられて、静岡音楽教育研究学会『音楽教育実践報告誌第6号』を刊行できましたこと、編集委員一同大変嬉しく思います。2021年3月に『音楽教育実践報告誌創刊号・第2号合併号』を刊行してから毎年途切れることなく、本年度も第6号を刊行できました。これもひとえに、原稿をお寄せくださる皆様のおかげと心より感謝申し上げます。また、査読をお引き受けくださった外部査読委員の先生方にはお忙しいところ多大なるご尽力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

第6号刊行に際しましては、例年同様8月の総会やホームページにて原稿募集を行いました。11月のエントリー締め切りまでに1件の応募がありましたが、さらに締め切りを1か月ほど延長し、学術論文を除いた領域において追加募集を行ったところ、新たに2件の応募があり、審査委員会による厳正な審査のもと、今回「研究ノート」1編、「実践報告」1編、「書評」1編を掲載するに至りました。その他にも、2024年度の事業中間報告と同年度音楽専攻卒業生の卒業論文の題目も掲載しております。

この報告誌が会員の皆様にとって役立つものであるだけでなく、音楽教育や音楽活動の発展に貢献し、静岡音楽教育研究学会の益々の発展につながっていくことを強く願っております。来年度も引き続き『音楽教育実践報告誌』が刊行できますよう、会員の皆様には、日頃の研究活動、教育活動、演奏活動の成果をぜひとも次号の『音楽教育実践報告誌』に発表くださいますようお願い申し上げます。

最後に、『音楽実践報告誌』の編集、刊行にあたりましては、出版社の方々や、役員の皆様のご尽力に支えられております。お世話になりました皆様方に心より感謝申し上げます。

(文責：明和 史佳)

音楽教育実践報告誌 編集委員

田代 和久【編集委員長】

明和 史佳

望月 たけ美【兼、査読・審査委員長】

岡田 知也（外部委員【査読担当】）

横山 真理（外部委員【査読担当】）

音楽教育実践報告誌 第6号

発行日 2025年3月31日

編集・発行者 静岡音楽教育研究学会

静岡県静岡市駿河区弥生町6番1号

常葉大学静岡草薙キャンパス 明和史佳 研究室内  
054-297-6100(代)